

# 大阪大学医学部の歩み



公益社団法人 医学振興銀杏会  
(大阪大学医学部学友会)



この冊子は大阪大学医学部の卒業生や各講座に在籍した先生方からのご寄附をもとに、公益社団法人医学振興銀杏会(大阪大学医学部学友会)が制作しました。大阪大学医学部における医学伝習史を知る一助となれば幸いです。

## 医学部の歩みを地図で辿る



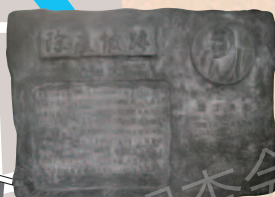
大阪大学中之島センター



適塾跡(史跡・重要文化財)



大手町に開いた種痘館跡



除痘館由来を記す銅板



国立病院機構  
大阪医療センター  
(旧国立大阪病院)



西本願寺  
(津村別院)  
北御堂



大福寺山門

- 適塾の移転経路
- 医学校以降の移転経路
- 除痘館の移転経路
- - - 教員は移動



## 大阪大学の歩み

- 1838年 天保9年 緒方洪庵 大阪に適塾を開く
- 1849年 (嘉永2年) 洪庵 除痘館を開く
- 1868年 明治元年 大阪裁判所に病院建設の御沙汰書
- 1869年 明治2年 2月 仮病院を開く(大福寺)  
8月 大阪府病院竣工し、大阪府医学学校開設  
仮病院を廃す。
- 1870年 明治3年 大学(後に文部省)の管轄となり  
大阪医学学校と改称  
除痘館、大阪医学学校に合併され、附属種痘館に
- 1873年 明治6年 大阪府病院と改称
- 1879年 明治12年 中之島に移転し 大阪公立病院と改称
- 1880年 明治13年 府立大阪病院、府立大阪医学学校と改称
- 1888年 明治21年 大阪医学学校と改称
- 1903年 (明治36年) 大阪府立高等医学学校  
大阪府立高等医学学校病院 改組と改称
- 1915年 (大正4年) 府立大阪医科大学 昇格と改称
- 1919年 (大正8年) 大阪医科大学 大阪医科大学病院 昇格と改称
- 1931年 昭和6年 大阪帝国大学医学部 同附属病院昇格と改称
- 1949年 (昭和24年) 大阪大学医学部 同附属病院 改称(新制度)
- 1969年 (昭和44年) 医学伝習100周年
- 1993年 (平成5年) 吹田地区に移転
- 1998年 (平成10年) 大阪大学大学院医学系研究科に改組し改称  
(大学院重点化)
- 2004年 (平成16年) 国立大学法人大阪大学  
大学院医学系研究科に改組
- 2019年 (平成31年) 医学伝習150周年  
令和元年

## 中之島とは



長崎港の出島(下)と唐船(中)オランダ船(右)

た。開塾期間に長短はあるが中之島やその界隈には20余の学塾があったとの記録もある。

後に医学部附属病院となった場合は秋田、久留米、中津などの藩邸があった。その南側には適塾で塾生、塾頭として知られる福澤諭吉生誕の地と刻む石碑が現在もある。行方不明となった石碑もある。病院の敷地の南端にあった雙松岡と刻んだ石碑である。石碑は1940年に長崎県人会が建て、背面には時の県人会の会長で、大学総長楠本長三郎撰の碑文が刻まれていた。当時名の知れた国学者が協同して開塾したこと等の経緯を記していた。その後、病院は移転し跡地の整理時には、石碑は設置場所が決まらず、仮設場所を転々とし(写真はその1コマ)、現在は行方不明である。

現在の我々には、中之島にあった大学、医学部の跡を辿ることができるのは中之島センターだけである。そこは1879年(明治12年)2月に大阪公立病院として開院式を挙げて以来、1993年(平成5年)に病院、学舎等が吹田に移転を完了する迄の110年余の間、学舎があった場所である。

### 中之島への思い

中之島キャンパスでは例年秋に医学部学生が主催する学生祭が例年行われていた。吹田キャンパスに移転後も中之島時代以来の「中之島祭」と呼び、毎年秋に学生達が主催している。

かつて医学部・病院があった中之島は北は堂島川、南は土佐堀川に挟まれた中州である。川は浅く小型船しか通らない。大きな船で各地から運ばれた荷貨物は川口で積み替え、両岸に所狭しと並び建つ藩の蔵屋敷に運ばれる。中之島に集まる物産は多く、数量、金額とも全国の6割にも達する程であって、川面の往来する船、両岸の藩邸が集まる様は見物だったことだろう。荷の中には、中国、オランダからの荷貨物等が長崎を経て運ばれて来た。

集まるのは荷貨物だけではない。様々な情報、新知識など多様であった。その事に関心を寄せる人々も集まり、各藩の蔵屋敷には、有為の学者や学問を志す人々が集まり、新知識を広めようと、開塾した人は少なくない。そんな一人が緒方洪庵で最初に訪れた師は中天游で思々斎塾であつた。



雙松岡の石碑



竣工当初の中之島センター



# 洪庵の事蹟

適塾を開く(1838~1862)



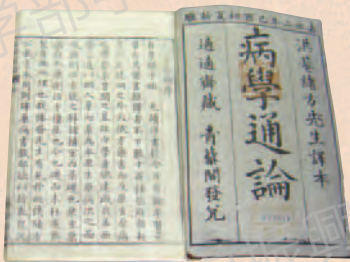
現在の適塾



洪庵の座像(銀杏会館医学史料展示室)

緒方洪庵(1810~1862)は岡山備中足守に生まれたが、12歳で父の蔵屋敷詰めに同行して大阪へやって来た。そこで、蘭学者の中天游に出会う。いったん帰藩するも、程なく中天游の塾(思々斎塾)に入塾している。中天游は医者ではあるが、蘭文の解説に長けていて、洪庵は塾で読解力を仕込まれている。その後、江戸へ出て、中天游の師の宇田川榛齋うだがわしんさいや同門の坪井信道つばいしんどうに蘭医書の読解をさらに仕込まれている。そしてそこにあった大量の蘭医書を次々と読破し、全訳した手書き冊子を多数残している。

19世紀初頭の日本では、蘭書を所持したり、蘭文の写しを持つ事さえも自由ではなかった。洪庵の蘭医学に対する最新の知識への渴望はすさまじかった。江戸遊学の後、洪庵は長崎へも遊学し、その後帰郷はしたが、ほどなく又々大阪に出てきた。蘭書を解説し読書仲間の集まる場として適塾を開いたのは1838年の事であった。洪庵は江戸にあったとき、師達から「病理学」の必要性を聞き、宇田川榛齋は病理学のことを整理しまとめることを洪庵に遺言とした。世界では18~19世紀には病理学は急速に進展していて、榛齋の遺稿は時代遅れの感さえあった。洪庵は榛齋の遺稿に自らが収集した幾多の最新情報を追加して「病學通論」を書いた。初稿以来、幾度も書き直し、10余年が経って刊行された。遅延したのは別の要因もあった。それは医書でも蘭訳書とあれば出版が困難な時代で、ながく蘭医、蘭学者を苦しめていた。



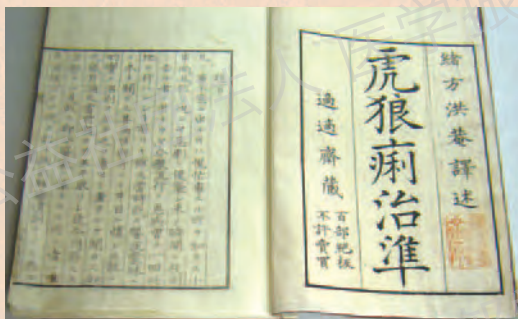
洪庵最初の刊本



上:ドイツ語原書  
下:オランダ語本



洪庵による蘭書の日本語訳30巻



虎狼痢治準

洪庵は生涯を掛けた名訳著「扶氏經驗遺訓」30巻本の出版の時の事でも同様な苦しみに遭っている。原著はドイツの内科医フーフェランドの50年に亘る治療経験をまとめた書で、内科治療指針とも言うべき実践記録として高く評価され、世界各国でそれぞれの国の言語に訳され、広く流布した。その蘭訳書をもとに和訳したのである。

洪庵は蘭書を翻訳し講義しただけではない。1822年長崎に上陸したコレラ(当時は虎狼痢コロリと呼んだ)は、またたく間に西日本から東日本へと感染を広げ、多くの病死者を出し、社会を不安に陥れている。細菌学も未だない時期とあっては、原因はわからない。しかし、罹患者は多い。医者としてあらゆる知識を動員して「虎狼痢治準」を急遽書き上げ、100部限定として刊行し、医者仲間に届けている。

しかし、そこに書かれた方法で治癒する事はなかった。

現在でも治癒までには数週間かかる。それはコレラ菌が人体内で排出する毒素の除去が必要だからだ。細菌どころか、毒素の事とあっては、なす術もなかっただろう。しかし、本書の刊行以後、コレラ患者に対応する医者の罹患者が極度に減少したことには注目したい。



# 除痘館

(洪庵と種痘)

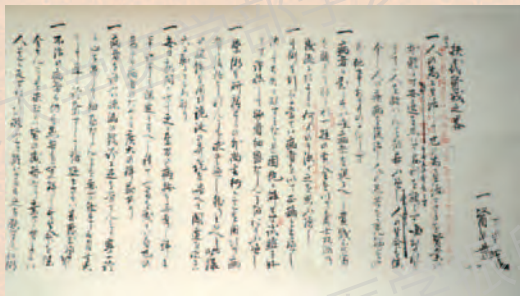


江戸へ出立に際して除痘館に遺した肖像画

洪庵が江戸の医学所に召し出され、大阪を出立するに際して、種痘館に残した左の彩色の肖像画には「としことに おひそふのへの こまつ原 ちよにしけれと うゑもかさねむ」との歌が書き残されている。種痘館への惜別の意を余すところなく詠んでいる。洪庵は医者、教育者と同時になかなかの歌詠みで、数百の詠み歌が残されている。

19世紀初頭の日本を始め、世界各地で最も恐れられた病に天然痘がある。1798年イギリスのジェナーによって牛痘種痘が人間にも極めて有効かつ安全である事が報告されると、またたく間に世界中に広まった。しかし、我が国に有効な痘苗(痘痂)が渡来したのは1849年の事であった。それが京に届いた事を知るや洪庵は直ちに痘苗の入手を図り、大阪に除痘館を開き、広く接種をはじめた。しかし、これを広く全国に広めるためには確実な接種技術や痘苗活性維持などの術を、医者が承知しておく必要性を覚り、その為には学修と研修、そしてそのための期間が必要なこと知った。1849年11月には、同志と共に除痘館を開き、教育をはじめている。そして、技術教育を受けた者には種痘医免許を賦与している。当初は私的なものであったが、1858年除痘館が官許(公的にはこの時「種痘館」となったが、永年の習慣から、以後も除痘館と呼び習わしている)を受けたことで、除痘館の出す免状は公的な医師免許となった。これが我が国での公的な医師免許の始まりである。

# 扶氏医戒之略



洪庵が遺した医訓の代表は「扶氏医戒之略」であろう。「扶氏経験遺訓」の訳に際して、巻末の「医者之義務」の章が気になった洪庵は、後に自らの経験も鑑みて、判りやすい日本語として12条に要約している。最終稿があるのかどうかは判らないが、ところどころに朱書の推敲跡がある書が残されている。

大学医学部関連の棟屋では病院玄関に入った右のガラスケース中を始め、研究科長室、医学史料展示室など数カ所に複製を掲示している。

その全文を下に記しておこう。

## 扶氏医戒之略(徳川家蔵書から)

- 一、人の為に生活して己のために生活せざるを医業の本体とす。安逸を思はず名利を顧みず、唯おれをすて、人を救はんことを希ふべし。人の生命を保全し、人の疾病を復治し、人の患苦を寛解するの外他事あるものにあらす。
- 二、病者に対しては唯病者を見るべし。貴賤貧富を顧みることなかれ。一握の黄金を以て貧士双眼の感涙に比するに何もので深く之をおもふべし。
- 三、其術を行ふに当りは病者を以て正鵠とすべし。決して弓矢となすことなかれ。固執に僻せず、試験を好まず、謹慎して眇看細密ならんことをおもふべし。
- 四、学術を研精するの外、言行に意を用ひて病者に信任せられんことを求むべし。然れども時様の服飾を用ひ、詭譎の奇説を唱へて、聞達を求むるは大に恥るところなり。
- 五、毎日夜間に方て昼間の病按を再考し、詳に筆記するを課定とすべし。積て書を成せば、自己の為に病者のためにも広大の裨益あり。
- 六、病者を訪ふは、疎漏の教診に足を勞せんより、寧ろ診に心を勞して細密ならんことを要す。然れども自尊大にして屢々診察するを欲せざるは甚悪むべきなり。
- 七、不治の病者も仍其患苦を寛解し、其生命を保全せんことを求むるは医の職務なり。棄て省みざるは人道に反す。たとひ救ふこと能はざるも、之を慰するは仁術なり。片時も其命を延んことをおもふべし。決して其死を告べからず。言語容姿みな意を用ひて之を悟らしむることなかれ。
- 八、病者の費用少なからんことをおもふべし。命を興ふとも、命を繋ぐの資を奪はば、亦何の益かあらん。貧民に於ては茲に斟酌なくんばあらず。
- 九、世間に対しては衆人の好意を得んことを要すべし。学術卓絶すとも言行厳格なりとも、童民の信を得ざれば之を施すところなし。普く俗情に通せざるべからず。殊に医は人の生命を依托し、赤裸を露呈し、最密の禁秘をも啓き、最辱の穢侮をも告ざることを能はざる所なり。常に篤実温厚を旨として多言ならず。沈黙ならんことを主とすべし。博徒、酒客、好色、貧利の名なからんことは素より論をまたす。
- 十、同業の人に対しては之を敬し、之を賞すべし。たとひしかること能はざるも勉めて忍はんことを要すべし。決して他醫を議することなかれ。人の短をいふは聖賢の明戒なり。彼が過を擧るは、小人の凶徳なり。人は朝の過を議せられて、おのれ生涯の徳を損す。其得失如何ぞや。各醫自家の流有て、又自得の法あり。漫に之を論すべからず。老醫は敬重すべし、少輩は愛賞すべし。人もし前醫の得失を問ふことあらば勉めて之を得に帰すべし。其治法の当否は現症を認めざるは辞すべし。
- 十一、治療の商議は会同少ながらんことを要す。多きも三人に過ぐべからず。殊によく其人を揆ふべし。只管病者の安全を意として、他事を顧みず、決して争議に及ぶことなかれ。
- 十二、病者皆て依托せる醫を捨て、竊に他医に商ふことありとも、漫に随ふべからず。先其醫に告て其説を聞にあらざれば従事することなかれ。然りといへども、実に其誤治なることを知て、之を外視するは亦医の任にあらず。殊に危険の病に在ては遲疑することあることなかれ。

安政丁巳春正月

公裁謹誌

緒方章 印

公裁 印



# 大阪医学校はじまる

1868年(明治元)10月 明治維新の2ヶ月後、次のような布告文が公示された。

此度追手前に於て新大學取建に相成、舎密術を始め英學、佛學、蘭醫學、數學、王學等  
學術御開ニ相成候付、諸藩ニ而稽古望之者有之候は、大阪府に可申出候、尤當時御普請ニ付、  
来三四月頃より稽古相成り可申候間、……

文面は医学に限定したことはない。多くの分野での変革を教育を通じて進めることを大阪に迫ったのだろう。系統だった教育・育成には、経験豊富な熟達者(教員)が必要である。医に限れば、幕末期の大阪には緒方洪庵が開いた適塾、除痘館があり、そこで育った人々が維新後の教育の現場に向かったことは言うまでもない。

下は仮病院での職員学生達の写真である。2列目中央白服の人がボードイン、その前に座す人が緒方惟準おがたこれよし(校長、洪庵の嗣子)、両側は教員達で、多くは適塾、除痘館にあつて教育を担当していた。



仮病院を開く(1869年2月、大福寺、上本町4丁目)

ボードインの講義はオランダ語である。多くの学生には理解出来ない。蘭語の通訳が必要で、教員達が訳して概要を話す方式であった。文字は読めても、留学経験を持つ惟準など数人を除いては音声の理解は難しい。専門の訳官が必要で、三瀬諸淵みせもろぶちらがいた。



三瀬諸淵と妻タカ

三瀬諸淵は多くの蘭医から医学を学んだが特に大村益次郎にも師事している。また蘭人とも交流し、会話には通曉であった。妻タカはシーボルトの孫娘である。

大阪府病院の本院の建築は鈴木町で始まっていて、1869年の秋にはほぼ完成していたが、仮病院からの移転は1870年1月であった。



医学校病院竣工し移転(1870年2月、鈴木町)

同じ頃大きな事件が京都で勃発した。1869年9月4日時の兵部大輔・大村益次郎が京都で浪士達に襲われ大腿骨に届くほどの刃傷を負った。直ちに大阪府病院から、ボードイン、緒方惟準、訳官三瀬夫妻、さらにはシーボルトの娘でタカの母イネなどが急遽招集された。そのとき、既に負傷してから10余日が過ぎていた。患部の切断が必要なことを話したが、時の益次郎の立場からは、新政府の高位からの許可が必要とのことで、有効な処置は何も出来なかった。使者を東京に遣わし、許可を持った使者が京に帰った事を知らされたボードイン、惟準らは京に向かっている。しかし、その時には傷口からの異臭は病室に満ちるほどであったという。ボードインは完成間近の大阪府病院への転送を決断した。しかし、時既に遅く、切断はしたがその効果はなく益次郎は落命した。その歴史を語る跡が左である。益次郎は切断した足を師の洪庵の墓の傍らに埋めて欲しいと遺言し、洪庵夫妻の墓前に「益次郎足塚」と刻む碑がある。(大阪天満・龍海寺)

益次郎は切断した足を師の洪庵の墓の傍らに埋めて欲しいと遺言し、洪庵夫妻の墓前に「益次郎足塚」と刻む碑がある。(大阪天満・龍海寺)

1870年1月、旧代官所跡に大阪医学校病院が竣工(このとき大阪医学校と改称)し、仮病院は廃止された。病院内の医学校では教職員の増員が行われ、手狭になったことから西隣に医学校校舎の建設が始まるなど、名実共に医の教育が始まった。一方、医学校の東隣では大阪軍事病院の建設が進んでいた。3月にボードインの雇用は完了することから外務省はオランダ大使からの要請もあって雇用期間を延長した。同時に軍事病院顧問として、惟準、ボードイン、堀内利国ら多くの教員を医学校から派遣している。



国立病院機構大阪医療センター南東角に立つ大村益次郎殉難碑と壁





大阪府医学校の教員  
(ボードイン、エルメレンス、林洞海)と学生



エルメレンスと学生達(府病院・西本願寺)

医学校設立当初の学生は多くが佩刀していたが、右の写真はそれから2年後の学生達で、すでに佩刀する者はなかったようである。

## 中之島時代はじまる



ボードイン



エルメレンス使用の机  
(医学史料展示室)



ボードイン講義録(医学史料展示室)

1879年、病院は中之島に移転し大阪公立病院と改称した。それまでの10年間は学校や教育に関する官制が相次いで発せられ、学校の改廃も繰り返された。詳細かつ正確に記すには多くの字数が必要だろう。府立医学校・病院の教員・職員、さらには患者達には極力影響が及ばぬように工夫されていた。そんな中で、ボードインの後を継いだエルメレンスは広汎な分野で講義を重ね、その講義録はこまめに出版されている。現在大学が所有するだけでも数十部を数える。1877年エルメレンスは任期満了をもって大阪府病院を辞したが、在阪期間は7年に及んだ。

医学部本館前に縦長の石碑が建っている。1879年母国に帰国したエルメレンスは、ハーグ市民病院の院長となり、翌年の1880年南フランスを旅行中に客死した。時に39歳であった。この悲報を聞いた大阪の人々は直ちに記念碑の建設を願い、市民から浄財を募り、中之島公園の一角に石碑を建立し、1881年8月に除幕式を行っている。1937年に、石碑は大阪帝国大学内に移設された(写真中)。現在は医学部講義棟の前に鎮座している。(写真右)



エルメレンス



中之島にあった  
エルメレンス記念碑



現学舎前に建つ記念碑

ところで、1879年4月に新たに竣工した大阪公立病院は、中之島の旧藝州藩(広島)蔵屋敷跡であった。建築は前年の8月に始まったが、その時のオランダ人教師マンスフェルトは、竣工を待たずに、1879年3月、任期満了となったことで母国へ帰った。ボードイン、エルメレンスと続いた外国人教師による医学教授はこの時に終わった。

しかし、最後のマンスフェルトは長崎にボードインの後任として来日し、熊本医学校、京都府病院を経て大阪公立病院に転任して来た。医者で教育者である彼が我が国の医教育がどうあるべきか、として教育規則の改正を進めたことは注目される。



マンスフェルト



## 医学校の変遷

1879年4月中之島の旧藝州藩(広島)蔵屋敷跡に新たに病院を新築し、大阪公立病院と称し開院式を挙げた。5月には公立病院に教授局を置き、授業教則を決めている。教授局長には橘良佳が東京大学医学部から着任した。公立病院は斬新な建物として関心を得たのであろう。左図のような軸画(蓄竹画)が遺されている。1880年に大阪公立病院を府立大阪病院と改称し、病院長に高橋正純を任じ、教授局を分離して府立大阪医学校とした。



大阪公立病院(1879年)



清野 勇

翌年、吉田顕三が病院長兼学校長となった。吉田はイギリスで学んだ医師で、内科を専門としていた。そして奈良(当時は大阪府下)、府内に分院を設け自ら診療を精力的に行っていた。

吉田が就任して程なく、府知事は医学研究には病体解剖が必要である、とする布告を發し「府立大阪医学解剖規則」を設けている。それから3ヶ月、医学校生の奥宮銀三郎(23歳)は、自らの病に因る死亡に際して特志解剖を願ひ出ている。岡澤貞一郎を介補として吉田院長が執刀している。病院としての病体解剖は3例目である。報告は「刀圭雑誌」に載せられている。鶴満寺には、岡澤貞一郎の碑文が今なお鮮やかな慰霊碑がその意志を今に伝えている。

1889年7月、大阪医学校(前年に府立大阪病院・医学校は改名)は病院長に清野勇を岡山から迎え、学校長兼任とした。清野はドイツに留学して医学を学び、大阪にあって初めてドイツ医学を系統だって紹介した。清野の任は10年に亘ったが、その後の校長、病院長は短期に交代する時期があった。

後のことになるが、1906年医師法が公布された。それによって大阪市医師会が設立され、初代の会長には清野勇が、議長には吉田顕三が就任している。



吉田顕三



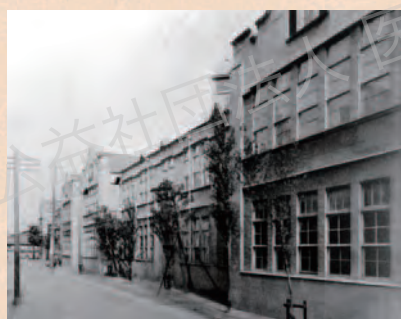
奥宮銀三郎碑(鶴満寺)



1897年頃の府立大阪医学校

府立大阪病院・同医学校は府立大阪医学校と名称を一本化した。左はその当時の建物である。

1903年、府立大阪医学校は再度病院と医学校を分離して、大阪府立医学校、同病院と改称されている。当時、学校や病院は名称を変更し、しばしば火災に見舞われた。一方で研究教育の拡大に対応して、新築や改築を短期間で繰り返していただけに、新築されるまで建物は存続したことは、希有なことであった。



大阪府立高等医学校学舎



大阪府立高等医学校病院

左の建物は府立医学校時代に建築され、高等医学校に引き継がれたが1917年の大火で焼失した。

これを最後に学校、病院は不燃の建物とするようになった。



## 府立高等医学校から府立大阪医科大学へ



佐多愛彦

1902年病理教室の主任であった佐多愛彦が校長兼病院長に任じられた。翌年3月、専門学校令が交付されたことで、9月に医学校は大阪府立医学専門学校と改称している。

佐多は就任の前年に医学校における自らの行動指針とする「医育論」を公表している。それは当時の医学教育制度にあって、明治維新後、早い時期から行われてきた専門学校と大学からなる2級制医(教)育システムを変更し、医(教)育の統一を謳った事にほかならない。

佐多は1897年の自らのドイツ留学後、絶えていた医学校教員の海外留学を再開し、奨励している。それは医育制度改革のためでもあり、また、自らも指針を得るべく、欧米へ度々出かけている。



佐多愛彦胸像  
(医学史料展示室)



医科大学でのアインシュタイン



野口英世像(箕面公園内)

一方で佐多は海外からの研究者を大学に迎えている。例えば1915年10月には野口英世が大学を訪れ、教職員学生に自らの研究のことを講演している。その時野口の母は郷(福島)から同道し、講演中は箕面で遊んでいる。佐多は歓迎会を箕面で行っている。その時の思い出を等身大の立像として川沿いの高台に設置した。これが箕面に野口の像がある所以である。

1922年にはアインシュタインが3ヶ月にわたって滞日し、12月初旬に佐多のもとを訪ねている。先日ドイツから交換留学生として本学にきた大学院生が、医学史料展示室にやって来た。目的は「佐多愛彦の医化学」とのことだった。佐多はドイツでは理科と医の化学の現状についても関心を寄せていたようで、彼が持参していたいくつかのドイツ語で書かれた小論の写しを拝見した。佐多の幅広い学識に改めて驚いた事であった。

大阪の医科大学にとって、1915年はまさに変革が進んだ年であった。

大阪に官立大学(国立大学)をとの願望は根強かった。そのために、まずは府立大阪高等医学校を府立大阪医科大学への昇格をめざし、同年10月始めには校名の改称、学則の改正(公立大学の学制に則った)などの案を文部大臣に提出している。それらは直ちに承認され、同月28日には府立大阪医科大学と改称し、同時に学則なども改正している。

佐多が望んだ医育一元化という永年の課題は公立大学へとする事で、進んだと言えるだろう。

左は1915年12月2日、府立大阪医科大学へと昇格した祝賀会の後、エルメンス記念碑前で記念に撮影された一コマである。

(左から桜根、楠本 一人挟んで 佐多、堀尾)





## 医学校大火に見舞われる

1915年2月に大火によって、学舎、病院など多くを失った。その時の様子を伝える写真が遺されている。



炎上する病院 (1915年2月)



焼け跡に立つ佐多愛彦学長ら



焼失後に行われた屋外診療

この大火を契機として突如「大学は病院と共に中之島から移転して再建すべき」との論が急浮上している。その主張する所は、病院収入に依存する経理体質に絡む事、第2点は中之島の敷地は狭隘で建物が密接するため、広潤な郊外から、煤煙の多い土地を避けた空気清浄な地に大学病院を建設せよという論法であった。

これに対し、佐多は「大学病院と施療」と題して長文の論文を公表し、さらには「大阪医大病院非移転の根拠」などの論考を相次いで発表している。その論点は、大学病院は学用患者を主とすべきか、大学病院は市中にあるべきか或いは郊外にあるべきか、の2つである。様々な討議が重ねられたが、中之島に再建することが市議会で承認された。その間病院の再建工事は進まず、10月には仮病院の建築が進められ、僅か3ヶ月で学用病館を開いている。臨床教育に必要な建物は仮設とはいえ、焼失から一年半を経て、全ての活動を始めている。



焼失後に建築された仮病院(1918年)

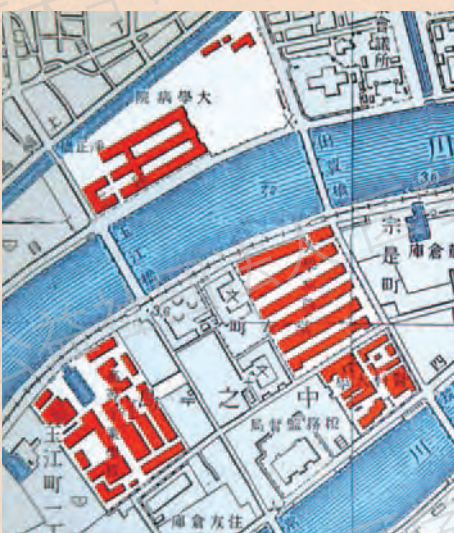
仮病院が再建されたのは、大火の翌年の1916年のことであった。大火は移転論を引き起こしただけでなく、治療は思うに任せず、大学の活動は減速し、その影響は厳しいものであった。



府立大阪医科大学学舎



火災の5年後に再建された府立医科大学病院(1920年)



左図は1926年の中之島の医科大学及び周辺地区の建物の情況を描いた見取り図である。

そこには堂島川を挟んで両側に病院、南の端に医学校があった。永年の医学校、大学病院は堂島川の南北に広がっていた。帝国大学となったとき、堂島川の北側を整備拡張して病院域とし、南側の病院棟があった地区を学部域とした。さらに南の地区には理学部などを設けたが、それらの部局は、1960年代初期に豊中、吹田地区へ順次移設し、医学部、病院、更に本部事務局だけが中之島に残った。

南北のなにお筋西に赤く色塗られているのは大阪高等工業学校の建物である。1929年、大阪高等工業学校は大阪工業大学となり、その3年後に大阪帝国大学と合併して大阪帝国大学工学部と改称した。なお、大阪工業大学は色塗られた敷地では手狭である事から、1929年に東野田に移転していた。



## 相次ぐ附置研究所の開設

大学が学内の力だけで研究、技術開発、そして人材を育成するには限界がある。特に先端領域でのこととなれば、なお必要である。しかし、大学に国から交付される資金だけでは困難な事が多い。その為には外部からの智力、資金など様々な面での援助が必要である。それは今も昔も変わらない。最近の事例で言えば、受託研究、受託事業、公的機関からの補助金(科学研究費補助金、医学関係機関からの研究費補助金など)、さらには寄附講座などなど、その幅は広汎である。

府立医科大学とて変わりはないが、組織が変更になった時に合わせるように、相次いで2つの研究所と病院などの寄附があった。



竹尾結核研究所

1915年大阪の竹尾治右衛門は結核研究を目的に医科大学に寄附を申し出、1917年2月研究棟の落成を待って竹尾結核研究所が始まった。研究所では多くの実績を上げたが、その一部は、右図のような「竹尾結核研究所 佐多愛彦及び協力者 結核研究論文集上下」として遺されている。



竹尾結核研究論文集(医学史料展示室)



山口厚生病院(1918年)

1918年には山口玄洞は財団法人山口厚生病院を設立し、寄附金を附して管理を府立医科大学に委託した。

ところで、山口厚生病院の場所には江戸時代旧中津藩の蔵屋敷があった。福澤諭吉はそこで生まれた。産湯の水をくみ上げた井戸の跡を示す「十」の1字が刻んであった。度重なる病院の改築の中で、その石碑もいつか失われてしまった。その後、病院南側に福澤諭吉誕生地跡を示す石碑が建立された。幾度か整備拡大され重厚になっている。現

在も建立の位置は変わらず、かつての病院跡地には朝日放送の社屋が建ち、南端の道路に面して配置されている。



福澤諭吉誕生地跡



塩見理化学研究所

1916年には高等医学校卒業生の塩見政次が病没に際し、資財を大阪医科大学に寄附し、財団法人塩見理化学研究所を設立した。所長は佐多愛彦学長。そこに参集した研究員のレベルは高く、業績には見るべきものが多かった。1931年、帝国大学開設時(所長は数学者として知られる小倉金之助であった)には、理学部棟はなく、3年後に落成した。しかし、当研究所の研究職員の大半が理学部教員として移行しており、多くの理学者を外部から招いた。その中には、湯川秀樹がいた。彼は在職中の1934年に中間子論の発表を行ない、1938年に理学博士の学位を受け、翌年母校の京都大学に帰っている。他にも八木秀次(第6代阪大総長)等が居て、多士済々であった。なお、研究所は1958年に終閉した。その後も建屋は医学部で利用されていた。

### 予科について

1914年、府立医科大学は改称と同時に学則を変更し、予科の年限を従来の2年から3年に変更した。本科の4年を加算して、帝国大学の7年制教育と同等になった。予科は1882年の開設以来、教育棟は本科に附置していたが、手狭なため、新築を計画した。そのさなかの1917年の大火のため、郊外移転とし、1919年10月に石橋待兼山に7棟からなる新教育棟が竣工し、直ちに教育が始まった。

その後、1928年政府は高等学校の整備計画を発表し、大学に於ける予科教育の制度を改変し、予科は実質、浪速高等学校へ移行とした。1931年3月末日に予科在学生在を医科大学本科1年生として収容した事で、予科の制度は終了した。



## 大阪帝国大学医学部に

1931年大阪医科大学は大阪帝国大学医学部となった。4月には学生はそれまでの年次に1を加えた学生として移行し、翌1932年春には帝国大学医学部第一期生が卒業している。



医学部玄関に掲げられた標札



創立祝賀式(中央公会堂にて・1931年5月20日)



帝国大学開学2年後に開かれた微生物病研究所

帝国大学の成立には2学部以上からなる事が必要であったため、大阪にあった大阪工業大学と合併し、さらに大学内の研究施設であった塩見理化学研究所(所長 小倉金之助)を理学部として整備することとし、準備が始まった。成案は3学部からなる大学であったが、大阪工業大学の合流が遅くなる事で、当面は医理2学部でスタートした。1934年春、大阪工業大学が計画通り合流して、医工理3学部からなる大学として整備された。

### 医学部の整備・拡充



帝国大学に移行した当初、医学部の講座(解剖学1・2・3、生理学1・2、生化学、薬理学、病理学1・2、細菌学、衛生学、法医学、小児科学、内科学1・2・3、皮膚科泌尿器科学、精神医学、理学的診療学、外科学1・2、産科学婦人科学、眼科学、耳鼻咽喉科学)は24を数えた。その後順次研究室は増え、医学系研究科医学専攻だけでも73講座(2017年当時)を数えている。

帝国大学開始時の医学部(左)と病院(下)

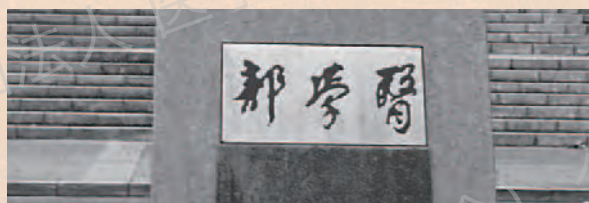
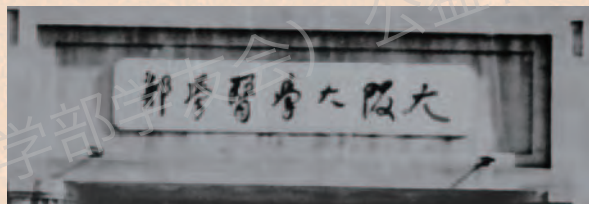


### 第二次世界大戦と医学部

大阪帝国大学の学生が戦地へ赴く動員はなかったが、大阪市内を始め近郊の工場への勤労働員は頻繁であった。一方、医学部の卒業生は医師の資格を持つことから、大戦中には大勢が戦陣医師として戦闘地のほぼ全域に派遣された。直接戦闘には参加しないが、傷病兵の治療など従軍中に巻き込まれ、現地で命を落とす医師は少なくなかった。医学部卒業生だけでも144名を数えている。落ち着いて医学に向かえる状況ではなかった。



## 玄関標札



帝国大学に昇格のおり、時の若槻禮次郎首相から「大阪帝国大学医学部」と揮毫する軸を受け、大学玄関の標札(10頁)とした。

1947年10月、新大学制度のもと「大阪大学医学部」となったことで、標札も改変した(上図)。それは上記の軸書から「帝国」の文字を切取った(左図)。(原軸書は医学史料展示室に)

新制度のもと、1947年大学は正式に大阪大学医学部と改称した。そのとき学内では戦時の跡を留める分野の廃絶、改変、改称が行われたが、1950年代以降は、医学研究の進展に対応すべく、講座、研究分野が整備拡充と共に相次いで新たに開設され、現在では医学研究科医学専攻に限っても70余の講座で構成されている。その間に医学部からは歯学部、薬学部と2学部が独立したが、新たに研究所などの施設も開設され、拡張と充実化は絶えることなく、続いている。

現在の医学部は吹田のキャンパス内にある。標札には軸書にある大阪大学の文字を刻まず医学部玄関前の礎石に左図のように刻まれている。

## 医学図書館

1950年代の大学では、研究教育面で大きな変革を果たしたが、その中で図書館の充実化を忘れることはできない。医学の研究教育において国の内外にかかわらず最新の情報知識を得、教職員、学生に提供することは重要かつ必要である。医学伝習85周年の記念式典の折、図書館建設計画が公表され、募金が行われた。5年後の国費の補助、ロックフェラー財団からの寄附をも得て、1959年12月に医学図書館を建設し開館した。その後、研究報告誌を始め、関係情報誌等の集積を進める一方、学部内外の関係者にも広く公開してきた。

大学の吹田地区への移転時、図書館は「生命科学図書館」として医学系研究科に隣接して建築され、さらに充実し現在に受け継がれている。



現在の生命科学図書館

## 玄関前の像



佐多愛彦像



楠本長三郎像

医学部の玄関前に二人の胸像がある。一人は医科大学の発展に貢献のあった佐多愛彦学長、もう一人は帝国大学昇格を主導し、総長として大学発展に貢献のあった楠本長三郎総長(2代目)像である。像は医学伝習85周年記念事業として作製し、当初から医学部に隣接して静置され、移転した現在も本館前に座している。ところで、その像の東に「炬火不滅」と刻む石碑がある。台座には由来を刻んだ銅版がある。最初の佐多像は大きな銅像であった。戦時の金属供出令に従って、台座だけが残された。残念に思う人々は佐多の著書から「炬火不滅」の言を表す石碑をつくり、残された台座に据えた。その石碑は医学部移転時に現在地に移設された。

なお、同時に作製された初代総長の長岡半太郎像は、現在は大学本部への登り道の傍らにある。



「炬火不滅」の碑



## 中之島から吹田へ



廃棄処分になった多くの研究道具

1961年9月15日 台風が中之島を襲い、水害と甚大な被害にあった。貴重な測定機器、資料など研究に欠かせない資財の損耗などは経済的負担に止まらず、研究、教育に多大の損失を招いた。理学部、産業科学研究所などはほどなく豊中、吹田地区へ移転した。医学部も移転の方針を定めたが、研究教育施設は医学部だけでなく、病院の事もあって、即座に移転出来る事ではなかった。

中之島が水害に襲われたのは、この時が初めてでなく小規模な浸水被害は台風が大坂を直撃する度にあった。天災とあってはなす術もなく、医学部、病院も移転せざるを得なかったが、移転を可能とする用地の選択には難渋した。医学部・病院の移転は、キャンパスのみに止まらず千里地区をライフサイエンスの拠点とするべく、学外の関係機関が集中する道をもつける事であった。まもなくして行われた万国博の跡地利用に着目し、移転の目途が立った。その時吹田地区には既に工学部、産業科学研究所などが移設し、薬学部、歯学部なども相次いで移転していた。

### 医学伝習 百周年記念式典(1969年)

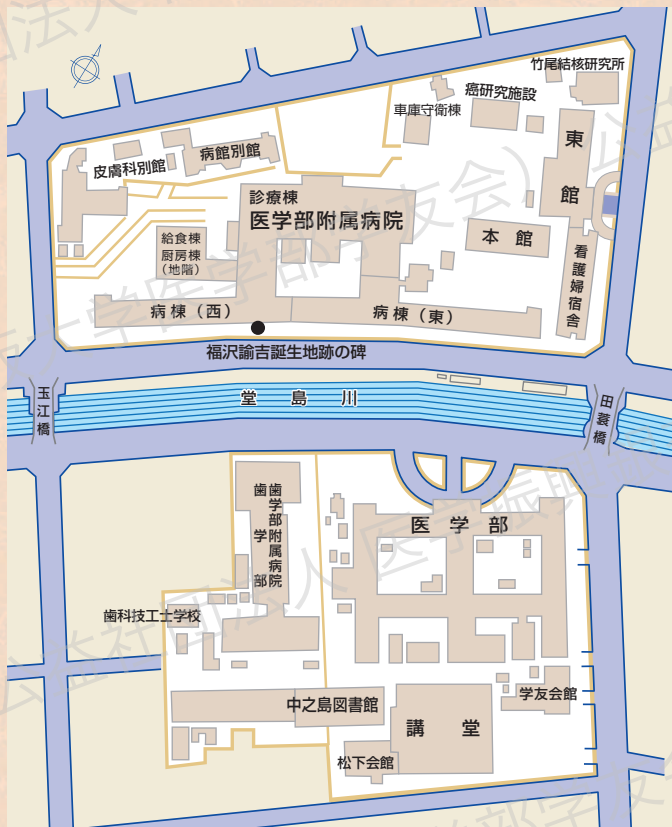


台風による被害を経験してから9年、医学部・病院は医学伝習100周年を迎えた。85周年の諸行事にならって、7つの事業を計画した。例えば、「大阪大学医学伝習百年史」の刊行、医学博物館ないし資料館の設立、学友会館の建設などであり全てを達成している。

左は記念式典の様である。舞台上で紹介されているのは100周年記念に铸造したレリーフ(像は開学初期の貢献者・緒方惟準と、ボードイン、エルメレンス、マンズフェルトの3人のオランダ人教師の銅板)である。現在これらの銅板は銀杏会館(大阪大学医学部学友会館・医療情報センター)の2階通路に飾られ、何時も通る人達を見ている。



大阪大学医学伝習百年史



移転前の医学部中之島キャンパス



おがた これよし  
緒方惟準



ボードイン



エルメレンス



マンズフェルト



## 吹田キャンパスにおける変革と発展

1991年から1993年にかけて吹田地区に移転した医学部は、基礎研究棟、共同研究棟、臨床研究棟、バイオメディカル教育研究棟の相互に繋がって一体化した4つのビルを中心に、共通棟(事務部)、講義棟、動物実験施設、RI施設、生命科学図書館、银杏会館を周囲に配し、中之島時代の2倍近くの床面積を有する近代的な建物群となった。移転にあわせて建物だけでなく組織としても、共同研究実習センター、動物実験施設、RI施設(現未来医療イメージングセンター)などの附属施設を新たに整備し、また、基礎と臨床を横断した先端医学研究の組織として、既存の癌研究施設、高次神経研究施設、微生物病研究所附属病院の診療科にさらに新設部門を加え、バイオメディカル教育研究センターを設立した。移転と同じ時期に豊中地区の医療技術短大が閉校し1995年10月には医学部保健学科が設立され、1996年から1997年にかけて吹田地区の歯学部の隣に保健学科の建物が完成した。これらの新しいキャンパス設備を基盤として、医学部は変革と発展の新たな時代を迎えた。



医学部医学科



医学部保健学科



医学部附属病院

### 新しくなった阪大病院

医学部の移転にあわせて附属病院も移転し、万博公園を見下ろす病棟と医学部ビルと連結した外来・中央診療棟で1993年9月に診療を始めた。移転にあたっては、新しい設備による高度医療への対応、同じ吹田キャンパスにあった微生物研究所附属病院との合併、コンピュータネットワークを用いた情報化、患者サービスの向上、を主眼として病院の仕組みそのものが再構築された。特に病院の情報化については

「インテリジェント・ホスピタル」というキャッチフレーズが掲げられ、オーダーリングシステムが稼働し、検査レポートや予約システムなどの紙伝票でやりとりされていた情報が病院情報システムに載せられることで職員・患者双方にとって便利になった。それまでの診療科毎のカルテから1患者につき院内共通の1カルテとなり、外来や病棟が講座別ではなく臓器別に配置されるなど、後述する再編の基礎がこの時作られた。



医学科建物配置図(2022年4月現在)



## 医学教育と医師養成をめぐる変化

吹田地区移転まで長らく、医学部の教育は6年のうち最初の2年間で医学進学課程(教養課程)であり、次の2年間で基礎医学、最後の2年で病院内での実習を中心に臨床医学を修めていた。平成に入り大学設置基準の大綱化により教養部が改組され、一方でより充実した医学専門教育を行うため、少しずつ専門教育の時期が前倒しされ、最終的に2年次の4月から基礎医学の講義が本格的に始まるようになった。広い視野をもった医学研究者や教育者および臨床医を育成することを目的として全国に先駆けて1975年に導入した学士入学制度も、当初の3年次からの編入から2年次編入となって現在まで続いている。臨床実習は旧来の「ポリクリ」と呼ばれる形式から、医療チームの一員として診療現場に参加する「クリニカルクラークシップ」と呼ばれるものになり、そのために医学生は全国の医学部で共通に実施される共用試験に合格しておくことが必要になった。全国的な基準に従った医学教育だけでなく、基礎医学研究に1年生から参加することを推進するMD研究者育成プログラムも実施されるようになった。これらの改革の結果、医学部の教育プログラムは医学教育の国際基準に適合していることが2021年に認定されている。医学教育においては修学支援が重要



奨学金同窓生の集い

で、さまざまな奨学金制度の支援により多くの学生が勉学に勤しむことができています。卒業して国家試験に合格した後は2年間の初期臨床研修を修めることが2004年から必須となり、初期研修後の専門研修の改革も進んでいるが、医学科教育センターと卒業教育開発センターの連携によって卒業前後を通して切れ目のない医師のキャリア養成を行うに至っている。

### 献体慰霊碑

医学教育のために献体下さった方々の尊いご遺志に深い感謝を顕すために、大阪大学医学部・歯学部献体慰霊碑が1993年度に建立されている。

銀杏会館近くの自然の中に切石積みによって聖域が作られ、その中央の水をイメージした御影石の上に、黒御影石の「生命の球」が設置されている。

この球体は大阪大学が求める学問の真理を表し、下部から上部に向けての変化は成長していく生命の表現を通じて献体者の尊い意思を讃えている。「生命の球」は彫刻家泉正敏に依頼して制作された。慰霊碑全体の環境デザインも含めた設計は建築家で当時大阪大学工学部教授の東孝光によるものであり、吹田キャンパスの中で静寂の場を作り出している。



## 大学の変革と医学・生命科学研究の発展

吹田キャンパスへの移転後は、大学そのもの、そして医学部も内外から一層の変革を求められる時代になった。1999年には大阪大学の大学院重点化に伴い、医学部もそれまでの学部中心の組織から医学系研究科の枠組みを中心とした組織へと変わり、大学院における研究者育成にもより力が注がれることになった。この過程で、移転に合わせて設立された附属施設であるバイオメディカル教育研究センターの各部門は大学院の基幹講座に転換され、センターは発展的に解消した。2004年には大阪大学が法人化により国立大学法人大阪大学となり、2018年には指定国立大学法人に認定され、世界最高水準の教育研究活動を展開するために大学運営に関する規制緩和がもたらされた。

医学部と附属病院の変革として大きなものは講座と診療科の臓器別再編である。2005年に内科と外科が臓器別に再編されて講座数も増え、大学・病院全体にとってより合理的なシステムに変わった。また、新しい治療法を開発することは大学病院の役割の1つであり、2002年には未来医療センター(現未来医療開発部)が附属病院に設置された。これにより、基礎研究の成果を新しい診断・治療法の実現へとつなげるトランスレーショナルリサーチ



最先端医療イノベーションセンター



(橋渡し研究)が推進され、また臨床研究中核病院にも選定された。さらに2014年には産学官が「ひとつ屋根の下で」連携する研究開発拠点として、最先端医療イノベーションセンター(CoMIT)が設置された。

吹田地区に移転したことのメリットの1つは、微生物病研究所、蛋白質研究所、歯学研究科、薬学研究科など生命科学系の他部局との距離が近くなったことで、連携がより容易になったことである。さらに細胞工学センターを発展改組してできた独立大学院である生命機能研究科、世界トップレベル国際研究拠点プログラムによって設立された免疫学フロンティア研究センター(IFReC)には医学部の講座も参加した。吹田移転によって、医学部の研究活動が旧来の部局の枠組みを超えて広がり、活性化している。



微生物病研究所



生命機能研究科



免疫学フロンティア研究センター

## 災害を乗り越えて

1995年1月17日午前5時46分、淡路島北部を震源とするマグニチュード7.3の阪神・淡路大震災が発生し、神戸を中心として甚大な被害をもたらした。移転したばかりの研究室内では棚などの転倒や多数の機器の損傷が生じ、研究現場は壊滅的状况であった。建物の内外壁面にも多数の亀裂が生じた。阪大病院でも多くの被害は生じたが、なんとか診療は可能であった。被災地では十分な診療ができない病院が多く、特殊救急部(現高度救命救急センター)を中心に重篤な被災患者を受け入れ、また、神戸大学病院をはじめとする兵庫県内の病院に医師、看護師、臨床検査技師、薬剤師の派遣や救援物資の輸送を行った。さらに、神戸市役所内など各所の救護センターに医療チームを派遣し、特に板宿小学校内の救護センターは3月末までボランティアの医学科学生も含めた阪大からの医療チームが24時間体制で運営を行った。



1995年1月  
医学部研究棟内の様子



1995年1月  
神戸市庁舎での支援活動



2018年6月  
接続部分が折れた医学部共通棟の中央階段

この阪神・淡路大震災は日本の災害医療の転換点となった。震災時には平時の救急疾患とは異なりクラッシュ症候群など災害特有の疾病が多発すること、また、発災直後の被災地では医療を提供することは難しく、ヘリコプターを使用して被災地域外の病院に患者を移送することが有効であること、機動性をもった救急医療の全国レベルでの支援体制の整備の重要性などが認識された。その後、阪大病院の屋上にヘリポートが整備されてドクターヘリが常駐するようになり、また、災害急性期に活動できる災害派遣医療チーム(DMAT)が全国で組織された。2011年の東日本大震災、2016年熊本地震においても阪大病院はDMAT隊の出動やそれに続く現地での医療支援を行った。また大阪も2018年6月の大阪北部地震、同9月の台風21号などの災害に遭遇したが、阪大病院はその都度乗り越えてきた。



ドクターヘリ



DMATカー



## 先人に学び歴史をつなぐ

### 銀杏会館(学友会館・医療情報センター)



医学科研究棟の北側に医学部の吹田キャンパス移転に伴って建設された。かつて中之島キャンパスにあった学友会館と同様、大阪大学に関係のある医学史料の展示・保存と、人や情報の交流を目的とした重厚な建築物である。卒業生や教職員のご寄附に三和銀行(当時)と阪急電鉄からのご寄附をあわせて建築され、平成7年(1995年)に大学に寄贈された。三階建ての館内には250名収容のホールをはじめ、大小の会議室や貴賓室、医学史料展示室、レストラン、ラウンジを有しており、サントリーより寄贈された現代彫刻作品の見守る中、医学部に限らず学内外の学会や講演会などが活発に開催されている。医学部学友会(医学振興銀杏会)の事務局もここにあり、卒業生にとっては母校の拠点というべき建物である。

### 医学史料展示室

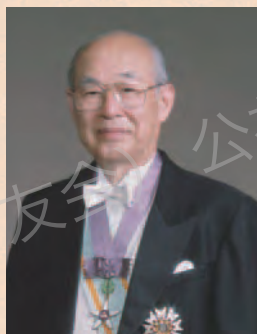
銀杏会館の一階には医学史料展示室があり、大阪で近代医学の伝習が始まった明治2年(1869年)以来の史料が保存・展示されている。明治初期の和綴りの講義録や当時の学生たちの写真、初期のオランダ人教師エルメンス氏の使用した執務机、第1号の卒業証書、帝国大学開学時に若槻禮次郎総理大臣(当時)が揮毫した「大阪大学医学部」の書など、中之島キャンパス時代に蒐集・保管されてきた数多くの貴重な史料をもとに、本パンフレットに紹介されている先人の歴史をたどることができる。医学部出身の文化勲章受章者の業績を紹介するコーナーもある。



### 医学部出身の文化勲章受章者



早石 修(昭和17年卒業)



岡田 善雄(昭和27年卒業)



豊島久真男(昭和29年卒業)



岸本 忠三(昭和39年卒業)

### 新史料館(仮称)



新史料館完成予想図

上述した医学史料展示室には、平成5年(1993年)までに医学部が吹田キャンパスへ移転する以前の史料がおもに保管・展示されている。そのため移転以降の史料保管と展示にくわえて現在の医学部の紹介を行う施設が、医学伝習150年(2019年)の記念事業の一環として建設されることとなった。卒業生や教職員から多額のご寄附をいただき、令和4年度(2022年度)竣工予定の新史料館(仮称)である。建物は銀杏会館に隣接しており、明治から昭和までの歴史を紡ぐ銀杏会館から、平成・令和以降の歴史を展開する新史料館へ、先人に学び未来へと歴史をつなぐ有機的な配置構成となっている。



## 医学伝習150周年から未来へ



医学伝習150周年  
記念式典・記念学術シンポジウム



医学伝習150周年記念祝賀会

大阪における医学伝習のはじまりから150年を迎えた2019年には、記念事業として記念学術シンポジウム等を挙行了したほか、医学史料展示施設とそれに関わる史料を整備するとともに医学伝習150年史を刊行した。この150年史は、教室史として医学科基礎編・医学科臨床編・保健学科編、2019年3月3日に執り行われた記念式典・記念学術シンポジウムの模様をまとめた医学伝習150周年記念誌の4冊で構成されている。

その後も新しい史料館の開設(16頁)や、医学部附属病院再開発事業もスタートしている。

医学伝習200年に向けた次の50年、さらにその次へと、先人たちの意思と努力を継いで、大阪大学医学部は益々の発展を続ける。



大阪大学医学伝習150年史



統合診療棟完成予想図



統合診療棟完成後の全景イメージ

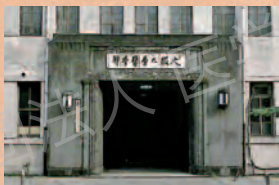
### 大阪大学医学部の歩み —第2版—

発行年月日 2022年4月1日  
執筆・構成 米田該典(第1版)、大阪大学医学部学友会(改訂部分)  
編集・発行 公益社団法人 医学振興銀杏会(大阪大学医学部学友会)  
565-0871 吹田市山田丘2-2 大阪大学医学部銀杏会館内  
印刷 日本印刷出版株式会社





〈表紙の写真(中之島時代最後の頃)〉



医学部玄関



医学部・講堂・学生会館



附属病院